

フィンランドでの子育て

(6) 社会が子どもを育てる

海外出産・育児コンサルタント

Care the World 代表

ノーラ・コーリ

【 子育て支援制度 】

フィンランドでは子どもとその家族に対してどのような支援をしているのでしょうか。まずは子どもに対する手厚い保護には驚きました。その姿勢は子どもたちがフィンランドの将来を担うという強い意識です。そのための手当なり、親へのサポートなのです。

日本では多くの女性が子どもが産まれるのをきっかけに家庭に入る傾向があります。しかし、フィンランドでは女性も男性同様、国にとって大切な働き手とみなしています。女性にも社会貢献を願っています。そのため、国が率先して子どもたちの教育に莫大な費用を費やし、国を支えるための準備をしてきました。働くことは国に税金を納めるということであり、その税金によって国の繁栄が期待できるからです。そのため、子どもが産まれたからと、そう簡単に仕事を辞めてもっては困るのです。男性も女性も子どもを育てなくてはならないからという理由で仕事を辞めないために、フィンランドではさまざまな子育て支援を導入したのです。

(注1)

< 経済面でのサポート >

子どもが生まれてからの最初の3年間は親の手を最も必要とします。中国では労働力確保のため、生後数カ月から保育園に入れるようにしましたが、フィンランドの人々は3歳くらいまでは親が家庭で育てたいという強い願いがありました。そのため、フィンランドでは保育園に入れるかそれとも家庭で育てるかのチョイスを与え、仕事を一時辞め、家庭を選んだ家族に対しても経済面で不利にならないように保障したのです。

そのため、子どもが3歳になるまで家庭に入って子どもを育てるものには Maternity Allowance (母親への手当)、Paternity Allowance (父親への手当)、Parental Allowance (親への手当)、といった手当を支給し、それを効率よく利用することで子どもが3歳になるまでは仕事をしなくても収入があるようにしました。

子どもを育てるのにはそれなりのコストがかかり、それは子どものいない家庭と比べたらかなりの差がでます。国の将来のために子どもを産み、国のために貢献した人たちは子どものいない家庭と平等であるべきと主張し、その差を国が埋めることを要求しました。その結果、子どもが17歳になるまで Family Allowance (家族手当) という手当が与えられました。さらに子ども1人に対して毎月1万円ほどの児童手当が17歳の誕生日まで支給されます。二人目以降は増額されます。さらに子どもの病気や事故、入院、治療、リハビリなどで仕事を休まざ

るをえない場合には、Special Care Allowance（特別養護手当）という手当が支払われます。持病や障がいをもった子どもを育てている家庭には Child Disability Allowance（障がい児手当）が支給されます。言いかえれば、子どもが病気でも、障がいがあっても、国としては親に仕事を辞めてほしくない、続けてほしいという願いです。

また、子どもの成長につれて、教育費の負担もあります。国はさまざまな教育オプションを与えてサポートしています。そして、経済的支援を具体化しました。例えば、就学前のオプションとして、親が自宅で育てる、公立のデイケアに入れる、プライベートのケアを選ぶ、とあります。親が自宅で子どもを見る場合には Home Care Allowance（自宅保育手当）がでます。プライベートのデイケア、自宅でデイケアを運営している保育ママさん、また個人的に誰かを雇った場合は、Private Care Allowance（プライベート保育手当）が出ます。ちなみにデイケアセンターのような施設に通わせている場合には、各家庭にではなく施設に直接相当分の手当が支払われます。

< 休暇などの手当 >

休暇についても、国は子どもを育てている親に対して寛大に休みを保障しています。どちらの親でもとれる育児休暇は子どもが生まれてから3年間ほどあります。その場合、企業は育児休暇を認めて、さらに、職場への復帰を保障しなくてはなりません。休暇にはある程度の柔軟性があり、1日の労働時間を短縮した形で休暇を消化することもできます。例えば、本人が希望すれば短縮勤務にして、子どもが小学校に入学するまでは6時間勤務を選ぶこともできます。

10歳以下の子どもの病気で休まなくてはならない場合は、無給で Temporary Child Care Leave（一時児童介護休暇）を取ることができます。また病児代理保育サービスというものがあります。これは国からの手当ではなくて企業からのサービスです。企業が病気の子どもの世話をしてくれる看護者を派遣します。親はかかった費用を企業に請求するか、または看護者の派遣会社が企業に請求します。たとえば病院の外科医で手術の予定が入っていた場合、子どもの発熱で手術をキャンセルすることはできないので、そのような場合、病院側で看護者を派遣します。

【 父親の育児参加 】

「平等」を唱えるフィンランドでは、子育ても男女平等です。それは妊娠段階での出産準備教室への参加やお産の立ち会いから始まり、父親も子育てをするのは当然ということです。そもそもほとんど共働きのフィンランドでは二人で協力しないととても子どもは育てられないのです。

手伝うのではなく、父親も主体的に子育てをするということです。それが可能なのも5時、6時の早い帰宅、5週間もある夏季休暇、父親にも与えられるさまざまな子育て手当などがあるからでしょう。二人で育てていれば母親だけに子育ての責任を負わせることもないでしょうし、父親自身も子どもの日々の成長と喜びを共有できます。そしてたとえ離婚、別居となっても、相手と可能な限り協力し、親としての責任を果たさなくてはなりません。

町を歩いているだけでも、父親がごく自然に子どもをベビーカーに乗せ、遊んだり、世話をしている光景によく出会いました。私がホームステイしたご家庭でも父親は母親が指示を出さなくても、その前に当然のこととして自発的に子どもの靴を履かせたり、お風呂に入れたり、本の読み聞かせをしたり、寝かしつけたり、食器を片付けたりと、上手に役割り分担ができていて、二人で平等に子どもを育てていました。保育園や習い事の送り迎えは、父親がするのはごく普通だそうです。

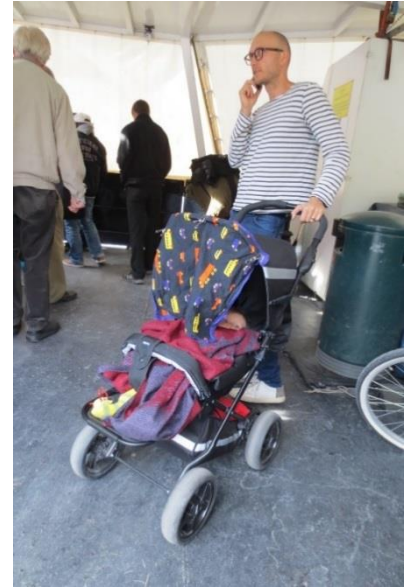


Photo by Nora Kohri

父親がベビーカーを押している光景はごく自然で一般的

【 子どもの預け先 】

国によっては子どもの世界と大人の世界をはっきり分けていて、大人の場合に子どもを連れてきてはいけないというはっきりとしたルールの文化もあります。しかし、フィンランド人にこの質問をしたところ、逆に「なぜ預け先にそんなに困るのか」という質問を返されました。つまり彼らからすると、子どもがいたら、どこへ行くにも子どもを連れて行くのが当たり前で、社会は子どもたちを社会の一員として受け入れるべきだという考え方です。

母親に用事がある場合は、父親が子どもを見ます。夫婦揃って夕食に出かけたい場合には祖母、ゴッドペアレンツ（代父母）、親戚、友人などに預けていました。子どもを見てくれる人を探すのに苦労はしないそうです。子どもがいる時には子どもと行ける場所を選び、あえて子どもを連れて行ってはいけないところへはこの時期には行かないそうです。1歳前後から子どもを保育園に入れる家庭も多いので、子どもと過ごせる短い時間を大切にしているようでした。また、保育園に入れていなくても自治体などの時間制施設などを週3回利用するなど、無料か費用をそれほどかけずに預けられるので預け先に悩むことはないそうです。

【 幼児教育 】

ヘルシンキに住む日本人駐在員家庭の多くはインターナショナル・スクールのような英語を主体とする私立幼稚園、もしくはモンテッソーリ教育などの現地の私立幼稚園に子どもたちを通わせています。これらの幼稚園のほとんどは4歳からの入園です。週末は、日本の文化と日本語にも慣れさせるために日本語補習校の幼稚部に通わせているご家庭もあります。フィンランドでは一般的な公立幼稚園は日本人の多く通う特徴ある私立幼稚園とは大きく違うので、ここでは公立幼稚園について述べます。

フィンランド人のほとんどは公立の保育施設に通わせています。地域によっては公立の保育施設し

か選択肢がないところもあります。フィンランドでは保育園と幼稚園の区別がなく、ほとんどの子どもは保育園から園生活を始めます。両親共働きの家庭がほとんどだからです。年齢が上がると保育園の中のプリスクールのクラスに入ります。このクラスはもう義務教育の一環に組み込まれています。

公立と言えども先生方の質は高く、大学を卒業していて、幼児教育の資格も持っています。施設は国の資金で建てられていて、遊具、昼寝用ベッド、給食室、室内設備も品質が高く、清潔です。給食は地方自治体からの助成で無料です。預けられる時間も早いので、給食時間は早く、10時とか11時頃に食べます。取り分け式で、栄養のバランスもよく考えられています。昼寝用の二段ベッドはデザイン性にも優れ、折りたためば壁に収まるように工夫されていました。先生方の年齢層は幅広く、日本のように元気いっぱいの若い先生方が中心とは限りません。行事なども数多く計画されていますが、勤務時間内で献身的に丁寧に取り組んでいました。幼稚園の先生方にも同じように家族があり、生活があるので、残業は極力避けていました。母親の多くが仕事を持っているので、幼稚園のお手伝いなどに出向くことができないのも事実です。



Photo by Nora Kohri

お昼寝のための二段ベッドはデザイン性にもすぐれている

日本では満6歳で4月から小学校に入学します。それに対して、フィンランドでは、小学校入学前1年は準備段階としてプリスクールに7歳になるまで通います。そして、日本では公立幼稚園でも入園料、保育料、給食費などがかかるところもありますが、フィンランドの公立保育施設はほぼ無料です。多少費用がかかっても政府から補助金が出ます。政府は男女が平等に就労できるように、保育施設数などの環境を整えているので、待機児童問題などなく入園が保障されています。

福祉が進んでいる国の特徴ですが、税金も高いことを忘れてはなりません。それでも男性も女性も働ける人は働くということで税金が納められ、子どもの教育に十分当てられるのです。

< オープンデー >

公立の保育施設では定期的にオープンデーが設けられています。主に育児休暇中の親のために、午前中、園の一室を開放しています。内容は日本の児童館での育児サークルのようなものです。移動動物園が来るような特別企画があればその日も招待されます。オープンデーの日はセルフサービスでコーヒーとクッキーなどが用意され、子どもを遊ばせている間、親同士や施設の先生方も交えて交流の場が設けられています。入園後の情報収集や園の雰囲気を知り、子どもたちが慣れるためにもこのオープンデーはとてもよい機会でしょう。

< 森の教室 >

「森の妖精」がいると信じられているフィンランドでは自然環境保護にたいへん力を入れていま
す。子どもたちが将来環境保護の活動に参加するにしても、まず、自然が自分たちに与えてくれる
恩恵を体験的に理解していなくては、実現できないだろうという考えです。そのため、子どもたち
は幼稚園の段階から毎日外に出て自然に触れます。雨が降ろうが雪が降ろうが、それも自然とみな
し、野外授業が雨天中止ということは、よほど気候がひどくない限りありません。森の中に行くとき



きは1時間から1時間半ぐらい歩き、
自然の中で就学前段階での理科、社
会、算数などの教科に関することを学
んでいます。ゆえに、幼稚園の先生に
なるには「自然環境」の単位を授業で
取ることが義務付けられています。

Photo by Ellen O'Donnell

レインコートを着て、先生はリスの指人形を使って学習

注1： 詳しくは <http://www.kela.fi/web/en>

次回はフィンランドの子どもたちが厳しい冬の中、どのような生活を送っているかをお送りいたします。どうぞお楽しみに。